

歩きたくなる街

—生活者の視点からの環境構築—

Attractive Walking Town Environment Based on Life-style of City Dwellers

那須 守

Nasu Mamoru

矢代 嘉郎

Yashiro Yoshiro

高度成長社会から成熟社会への転換期を迎え、都市デザインやまちづくりもパラダイムシフトが必要とされている。対応には居住の視点から都市の魅力を考えることが挙げられる。「歩きたくなる街」はその具現化の一つである。

特徴は「アイデンティティ」、「コミュニケーション」、「ヒューマンスケール」を生活の価値軸に設定した点にある。これらは、多様な人が定住する街に必要であると都市生活者から評価された。アイデンティティでは身近に実感できる暮らしやすさ、つまり緑・公共交通・集積と選択が評価されていた。緑によってアメニティ、健康、社会的交流を得ることや、ユビキタスサービスによってさまざまな行動選択の機会と場を得ることを事例として挙げた。

1. 生活者の視点から都市をとらえる

都市再生の成功を示す端的な指標の一つは、その街に住む人々が住み続けたいと思うことである¹⁾。日本の都市は、20世紀において経済活動優先、過度の自動車依存の結果としてスプロール化した。そのため、中心市街地には居住者の減少・高齢化、「シャッター通り」、散在する空地・空家など、居住環境の悪化とコミュニティ崩壊の問題を抱えることになった。さらに21世紀に入り人口減少、財政制約、地球環境の問題も顕在化してきている。これらの対応として「コンパクトシティ」の概念が提案されている。しかし、コンパクトシティはあくまでも土地利用の物理的形態にすぎない。それを実現しようとするビジョンとイメージが求められる²⁾。これに対して「歩きたくなる街」は、「多様な人が定住できる街」を目標に、生活者の視点から住み続けたいと思える街のモデルイメージを具体化した提案である³⁾。モデルイメージの構築にあたっては、首都圏の都市生活者を対象に多様な人が定住できる街についてアンケート調査を実施した。その結果、定住を誘発する生活の価値として、「アイデンティティ」、「コミュニケーション」、「ヒューマン

スケール」という三つのキーワードが明らかになった。これらを軸として歩きたくなる街のモデルイメージと調査・分析法を構築することにより、都市生活者がみずからまちづくりにかかわっていくことを容易にした。

ここでは、最初に歩きたくなる街を構成する三つの軸について述べる。次に、その中から身近に実感できる暮らしやすさとして、都市生活者に評価された緑を対象にし、都市の生物多様性の視点から緑が都市生活者に提供するサービス（生態系サービス）について述べる。最後に、情報通信技術を活用した街の魅力づくりの可能性について考察する。

2. 歩きたくなる街とは

2.1 生活者の意識に基づくこれからの都市居住の姿

首都圏の都市生活者を対象としたアンケート調査（1999年10月に東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県で実施、有効サンプル数849件）から、街が世代を越えて持続的に発展するためには、多様な人が定住できる街が求められていることが確認された⁴⁾。また、その実現に向けてアイデンティティ、コミュニケーション、ヒューマンスケールという三つのソフト面のキーワードが鍵を握っていることが明らかになった⁵⁾（図1参照）。

「多様な人」とは年代、同居世代、ライフスタイル、国籍の多様性を意味する。「定住できる」とは転居しながら住み続ける場合や、転出しても再び戻ってくる場合を含め、その街に軸足を置きながら生活している状態である。アンケート結果から、「多様な人が定住できる街」が望ましい理由として、「街に活気が出るから」、「街の人と親しくなれるから」、「街に愛着が持てるから」が挙げられた。しかし現実には高齢者のみの世帯が多く、未就学児や小学生のいる家族、子どもや孫と同居している高齢者など、多様な世

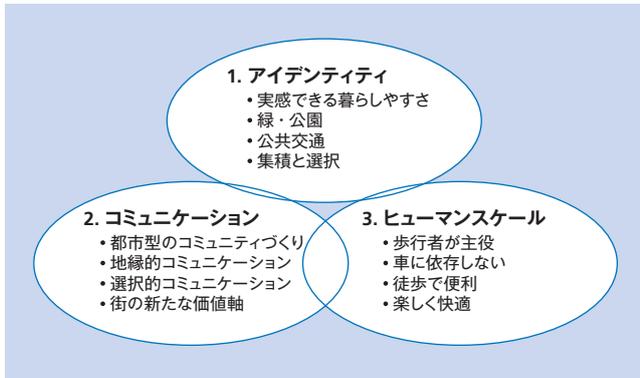


図1 | 「歩きたくなる街」を構成する三つの軸
これらの三つの軸は、「多様な人が定住できる街」についてのアンケート調査から明らかになった定住の要因となる生活の価値軸である。

代に住んでほしいと考えていることがわかった。

次に三つのキーワードについてである。アイデンティティは、自分たちの街に暮らすうえで実感できる魅力要素である。住民が街の魅力を実感し、共有のものとして尊重していく意思と愛着を持てるようになるために必要となる。コミュニケーションは、阪神・淡路大震災のような災害時には重要な役割を果たす。しかし過度に束縛されないしなやかな方法が求められる。ヒューマンスケールは、生活者を中心にした安全で快適な環境づくりのためにある。車に過度に依存しない街、人間感覚を重視した街が望まれる。これらのキーワードは高度成長時代には注視されて来なかった。しかし多様な人が定住できる街を実現するために必要なものであり、アンケート結果においても60～80%の都市生活者が必要であると回答した。

2.2 歩きたくなる街と生活の価値軸

多様な人が定住できる街の実現には、都市生活者が共通のイメージで街を評価し、検討していくことが大切と考える。都市生活者の求めている街の姿(イメージ)を、アンケート分析の結果からつくり上げた仮説が「歩きたくなる街」である。

この表現には、都市に暮らす生活者が歩きたくなるような魅力と必然性があふれているという能動的な意味を込めている。「歩く」という行為は環境や健康を重視するというライフスタイルも暗示している。さらに、歩きたくなる街は、どのような環境を構築すると歩きたい気分になるかという問題提起の意味合いを持つ。その際、図1に挙げた「三つの軸」と魅力要素の事例は検討基盤として機能する(表1、表2参照)。まちづくりの過程において、これらの要素は空間的・時間的・社会的文脈を考慮して選択され、都市生活者も関係しながら地域固有の魅力として育成されていくことになる。

表1 | 歩きたくなる街の魅力要素

三つの軸の視点から、歩いて生活するうえで魅力となる環境要素の例を示す。

三つの軸	魅力の要因	魅力要素の例
1. アイデンティティ	1.1 多彩な緑をもつ	鎮守の森、路地、生垣、緑のあるバルコニー
	1.2 誰にでもやさしい公共交通	デマンドバス、LRT
	1.3 時間の積み重ね、好みの選択	商店街のにぎわい、多様なライフスタイルへの対応
	1.4 街の個性を育てる	並木道、親水空間、コモンスペース
2. コミュニケーション	2.1 地縁を生かす	ネイバーフッドウォッチ、公園、井戸、コミュニティ花壇、店の人とのコミュニケーション
	2.2 趣味を生かす	ドッグラン、ゲームを通じたコミュニケーション、カルチャー教室、情報発信
	2.3 これからの都市型コミュニティとは	地域イベント、まちづくりNPO
3. ヒューマンスケール	3.1 車に依存しない	トランジットモール、自転車専用道、住宅地内の歩行者専用道
	3.2 安心して歩ける	ストリートファニチャー、オープンカフェ、ショーウィンドウ
	3.3 楽しく歩ける	散策路、ショッピングモール

注：略語説明 LRT (Light Rail Transit：軽量軌道交通)、NPO (Nonprofit Organization)

表2 | 魅力要素の事例

歩きたくなる街に必要な魅力要素の考え方や価値の具体例を示す。

魅力要素の例	考え方・価値
1.1 鎮守の森 ：諏訪神社 (東京・日暮里)	生活に身近な緑の原風景として鎮守の森がある。緑日のにぎわいや、子どもの頃に遊んだ思い出。街の記憶をつなく緑として大切に守っていききたいものである。
1.3 商店街のにぎわい ：高円寺(東京)	郊外の大型店にない時間の蓄積が商店街の特徴である。古いものと新しいものが混在した意外な組み合わせこそが街の個性となり、新しい街の活気をつくっていく。
2.1 ネイバーフッドウォッチ ：ピレッジホームズ(米国)	地域の防犯を目的として、コミュニティの目で監視することをアピールする活動。目的を共有化することによって、地域コミュニティの構築が進む。
2.3 地域イベント ：世田谷ほろ市	地域イベントは地縁のコミュニケーションを活性化させる。それだけでなく恒例化することで、外部からの注目も集まる。大事に育てることによって街の資産価値向上も期待できる。
3.1 自転車専用道 ：ベルリン	エコロジカルな生活の足として注目したいのが自転車。歩道、車道と明確に分離された自転車専用道を街じゅうにネットワークすると行動範囲も広がる。
3.2 オープンカフェ ：コペンハーゲン	楽しく歩けるだけではなく、くつろいだり、待ち合わせにも利用できるオープンカフェ。街の表情を豊かに演出し、活気やにぎわいを広げる効果を期待できる。

2.3 歩きたくなる街のデザイン

歩きたくなる街には表1、表2に示した多様な要素が生活の場と機能を形成し、生活の道によって有機的にネットワークされ、コンパクトに集積されることが必要となる。その際、次のデザイン要件を考慮することが求められる。

(1) 生活の場と機能に関するデザイン要件

- ・ライフステージが変化しても街の中で住み続けられる住宅のバリエーションがあること
- ・目的に応じて選択し、参加できる交流の場があること
- ・コミュニティの価値が資産価値として認知されること
- ・住民生活に価値を提供し、街の魅力を持続させ、活性化するための仕事(コミュニティビジネス)が育つこと
- ・子どもが安全に楽しく学び、遊べる場所があること

- ・多彩な緑のポキャブラリーが、街の個性ある景観と生活への潤いと寛ぎを与えること
- ・商店街、図書館、行政サービスなど生活に必要な機能が集積していること
- ・専門店、ブランド店、日用食料品店など目的に応じて店を選べること

(2) 生活の道に関するデザイン要件

- ・住まいを基点にして安全に、安心して歩ける生活の道が構築されていること
- ・街のどこへでも公共交通と徒歩、自転車で往来できるアクセスが確保されていること

3. 緑を触媒とした街の魅力づくり⁶⁾

3.1 緑の生態系サービスが街の魅力となる

都市の自然や緑は、街の魅力づくりに大きく関係する。前述した首都圏の都市生活者に対して街の個性となる魅力について調査した結果によると、街の歴史が古いことよりも、緑・公共交通など暮らしやすさが街の魅力となることがわかった(図2参照)。自然や緑の中での活動や景観的美しさが、街の魅力要素として認識されていた。同じ調査から、これら暮らしやすさの魅力は住み続けるための要因にもなることが確認された。

一方、国際連合「ミレニアム生態系評価」プロジェクトは、自然や緑が人にもたらす効用を「生態系サービス」と呼んでいる。生態系サービスには多様な側面がある。特に都市の暮らしやすさでは文化的サービス、つまりアメニティ、健康、社会的交流とのかかわりが強い。緑の中にとりリラックスし、快適に感じる(アメニティ)、育成や収穫など植物とかかわる作業によって心身の機能回復や収穫の喜びを得る(健康)、また、人との交流が円滑になる(社会的交流)という生態系サービスを得られる。これら緑の効用が都市生活者に支持されたと思われる。

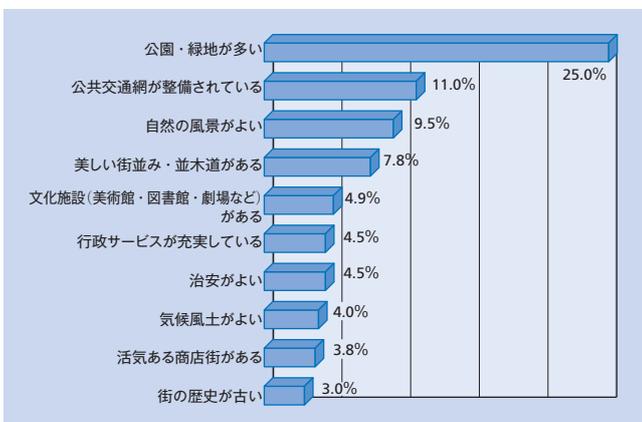


図2 | 街の個性と認識されたもの(複数回答、回答数811)
首都圏の都市生活者へのアンケート結果から、緑や公共交通など身近な暮らしやすさにアイデンティティを感じていることがわかった。

3.2 人と植物の関係をまちづくりに生かす

次に人と植物の関係を都市の魅力づくりに応用することを考える。それは、生活に安らぎや潤いをもたらすエコロジカルな緑地の育成に、都市生活者がかかわることであり、心身の健康を維持し、コミュニティの活性化を図るまちづくり活動である⁷⁾。

この活動モデルは、人間の欲求を5段階に階層化した心理学者アブラハム・マズローの「欲求段階説」に基づく。自然に接したい、自然の中で安らぎたいというのは生理的欲求(第1段階)や安全の欲求(第2段階)、育成管理で人と交流したい、管理行動を人に認められたいというのは所属と愛の欲求(第3段階)、承認の欲求(第4段階)、まちづくり活動のような社会貢献をしたいというのは自己実現の欲求(第5段階)となる。したがって動機をうまく与えることによって、上位段階の行動に進展していくというのが仮説である。

このモデルの参考事例には、サステイナブルコミュニティとして知られているビレッジホームズ(米国カリフォルニア州デービス市)や、20年かけて森林浴を身近に体験できる緑地を造り上げたサンシティ(東京都板橋区)が挙げられる。いずれも住民が緑地の建設や維持管理にかかわることによって、街の環境、人の健康、人と人との交流の健全性が維持されている。

活動を動機づける要因の一つに、管理作業によって得られる心身の健康(緑の生理的・心理的効果)が挙げられる。現在、都市生活の中で緑と接することによって緊張が減少するという癒(い)やしの効果や、管理作業を実施した後に心理的気分状態が全体的に向上するといった科学的データが蓄積されつつある^{8), 9)}(図3参照)。

自然環境の保全は、地球環境問題の一つである生物多様性の危機を回避するためだけでなく、人にとって生活の質である「住み心地のよさ」を確保するためでもある。少子高齢化が進展した社会において、自然(緑地)の管理不在

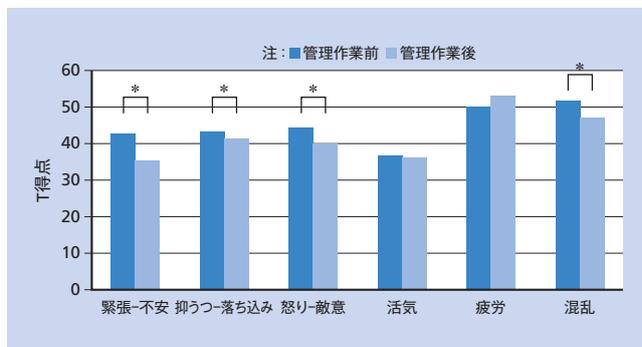


図3 | 緑地管理作業前後における気分状態の変化
*印を付した「緊張-不安」、「抑うつ-落ち込み」、「怒り-敵意」、「混乱」の気分状態が、緑地管理作業前に比べ管理作業後において、有意(p<0.05)に低下した。

は不安要因でもある。その際、緑地デザインの対象は緑地そのものではなく緑地を育てるプロセスとなる。この意味においても、この活動モデルによって都市に魅力的な緑を育成することが望まれる。

4. 情報通信技術で生活の価値を創出する

これからのユビキタス社会において都市がより魅力的であり続けるために、街の「エリアマネジメント」に情報通信技術を活用することが考えられる。エリアマネジメントとは、住民、事業者、地権者などの民間組織が主体となり、地区の価値を高める取り組みである。近年、地区間競争の進行や地区活力の持続に伴う魅力づくりといった背景から、その必要性が認識されてきている。

エリアマネジメントを支援するユビキタスサービスには表3の例を挙げることができる¹⁰⁾。センサーやIC (Integrated Circuit) タグから、人の動きや施設の稼働状況などの情報をリアルタイムに収集し、集積した情報を融合することによって、住み心地をよくするサービスを生活者にフィードバックする。街案内サービスによって緑、店、歴史的建造物などに設置されたICタグから利用者の関心やこだわりに応じた情報を得られると、行動の広がりや魅力の発見をもたらし、街のアイデンティティを認識することに結びつくと思われる。情報交流サービスによって多様なライフスタイルを持つ人が目的や関心に応じて集う場ができると、束縛感のある地縁的コミュニケーションに代わり、選択的コミュニケーションの場が増え、その輪が重なり合うことでしなやかにつながる都市型コミュニティの形成を促すと思われる。歩行者ナビゲーションによって目的地までの安全な経路を携帯端末から得られると、子育て世

表3 | 街のエリアマネジメントを支援するユビキタスサービス

(1)～(3)は施設管理、(4)～(8)は人の活動を支援するサービスである。

ユビキタスサービス	サービスの内容
(1) 災害時支援サービス (防災ネットワーク)	災害発生時の情報収集と緊急情報の発信、避難誘導を行う。
(2) エリアの一括管理サービス	建物設備 (空調・電気・防災・防犯など) を総合監視・制御し、快適な環境を省エネルギーで提供する。
(3) 交通サービス	駅周辺エリアを中心に歩行者・自転車・自動車向けに交通サービスの総合的な情報を提供する。
(4) 見守りサービス	安心して楽しめるまちづくりとして、緊急通報装置や防犯カメラなどをネットワークへ接続し警備会社 (監視センタ) などで監視する。
(5) 街案内サービス (観光・情報案内・インフォメーションサービス)	携帯端末や街頭設置端末により、施設案内やイベント案内などの情報提供を行い、利用者の属性に応じてリアルタイムに情報を配信する。
(6) 歩行者ナビゲーションサービス	交差点や拠点となる場所にICタグ、ICタグ埋め込み点字ブロックや無線LANによるマーカーを設置することで歩行者に情報を提供し、スムーズな誘導を行う。
(7) ロボット活用サービス	各種ロボットをネットワークに接続することにより、ネットワークを介してさまざまなサービスを提供する。
(8) 情報交流サービス	街中の交流スペースにおいて、趣味などの交流活動が行える。活動をより活性化するために高度な情報検索システムや立体映像端末などのツールが提供されている。

注：略語説明 IC (Integrated Circuit)、LAN (Local Area Network)

帯、身体障がい者、外国人などにとって安心して歩ける街となる。

これらのように、ユビキタスサービスは都市生活者にさまざまな行動選択の機会と場を提供する。しかし、技術は適用の場があって初めて機能を発揮する。同じように都市生活者も、価値に合った場や機会が与えられると活動にかかわるようになる。歩きたくなる街の実現に向けて必要となるものは、都市生活者・専門家・大学・行政など関係者の有機的活動を促進するためのマネジメント組織である。それは、初期段階から管理段階までの長期にわたって存続できることが求められる。したがって経済的にも自立できることが課題となる。

謝辞

本稿は、社団法人新都市ハウジング協会都市居住環境研究会、千葉大学大学院園芸学研究所の岩崎寛准教授との共同研究による。ここに記して感謝の意を表す。

参考文献など

- 1) 植田、外編：都市の再生を考える5 都市のアメニティとエコロジー、岩波書店 (2005.2)
- 2) 林、外編：都市のクオリティ・ストック、鹿島出版会 (2009.9)
- 3) 社団法人新都市ハウジング協会都市居住環境研究会：歩きたくなるまちづくり街の魅力の再発見、鹿島出版会 (2006.4)
- 4) 那須、外：都市居住に関する意識調査その2 望ましい都市居住のコンセプトに対する居住者の意識、日本建築学会大会梗概集、F-1、180-181 (2000.9)
- 5) 齋藤、外：都市居住に関する意識調査その3 コミュニケーション・アイデンティティ・ヒューマンスケールに対する居住者の意識、日本建築学会大会梗概集 F-1、182-183 (2000.9)
- 6) 那須・岩崎、外：都市における緑の健康・療法的効果利用—医療環境から地域環境へ、日本緑化工学会誌、34、3、51-56 (2009.2)
- 7) 那須：建設におけるビオトープの現在—生物多様性、CSR、まちづくり、法政大学人間環境学会人間環境論集、9、2、1-11 (2009.3)
- 8) 那須、外：ビオトープにおける管理行動の心理生理的效果に関する研究、日本建築学会大会梗概集、E-1、27-28 (2009.8)
- 9) 那須、外：間伐された都市林の心理・生理的效果、日本建築学会大会梗概集、E-1、97-98 (2010.9)
- 10) 大阪市都市工学情報センター、<http://www.osakacity.or.jp/>

執筆者紹介



那須 守

1978年清水建設株式会社入社、技術研究所 地球環境技術センター 所属
現在、緑地環境計画・評価の研究開発と応用に従事
技術士 (環境部門)
日本建築学会会員、土木学会会員、日本造園学会会員



矢代 嘉郎

1971年清水建設株式会社入社、常務執行役員 技術研究所長
博士 (工学)
日本建築学会会員、日本火災学会会員、国際防火技術者協会会員
日本火災学会賞ほか受賞